【金汰俓】 それでは第三セッションに入ります。まず東京大学伊藤由希子先生のご発表、その次に韓榮奎（ハンヨンギュ）先生のご発表を予定しております。

【伊藤由希子（東京大学ＣＯＥ研究員）】 東京大学研究員の伊藤由希子です。私の専門は倫理学、日本思想で、特に説話文学に見られる思想を研究してまいりました。

今回の発表では、姨捨伝説を題材にした『楢山節考』という小説を中心に、人は死をどう受け入れるか、という問題を考えていきたいと思います。

死生を位置づけるということ
――日本人の生命倫理の基底を流れるもの

伊藤由希子
東京大学ＣＯＥ「死生学」特任研究員

はじめに

二〇一〇年七月二十五日、ＮＨＫ教育テレビで、ＥＴＶ特集「食べなくても生きられる～胃ろうの功と罪～」という番組が放送された。

胃瘻とは、体表面から胃に開けた穴のことである。経口での十分な栄養摂取が困難になった者に対し、胃瘻にカテーテルを装着して流動食や薬剤を直接胃の内部に投与することで、効率的に栄養を補給することが可能になる。もとは開腹術で胃瘻が作られていたが、一九七九年に経皮内視鏡的胃瘻造設術（percutaneous endoscopic gastrostomy；ＰＥＧ）というあらたな技術が米国で開発された。これは、内視鏡（胃カメラ）を使いながら、わずか五～六ミリメートルを切開するだけ、十分程度で終わる手術である。このＰＥＧの登場により胃瘻は急速に普及し、日本でも四十万人近くが胃瘻の処置を受けている。

ところで、この胃瘻とＰＥＧはもともと、摂食・嚥下障害のある小児患者のために開発された技術であった。つまり、いずれは病状がよくなり、自力で経口栄養摂取が可能になることを前提とした技術だったのである。しかし、小児患者にとどまらず、さまざまな患者の栄養補給方法として応用されるようになることで、想定外の事態が、特に日本で進んでいるという。

……近年、ＰＥＧの簡便さが一因となり、過剰に施行されるようになってきたといわれている。つまり、患者が自分の口から食べることに困難をみせると、とりあえずＰＥＧをするという医師が多くなってきたのである。ＰＥＧを推進している日本の専門医は、「ＰＥＧの真の目的は再び経口摂取可能になることであり、その最善の方法がＰＥＧである」（鈴木、二〇〇〇）としているが、ＰＥＧの実際の対象者の多くは意識障害が重篤な高齢の脳血管疾患患者や認知症患者であり、二度と自分の口から食べることができずに生涯を閉じる人が大半であるといわれている。日本におけるＰＥＧ対象者のうち認知症末期の患者は、最近の欧米での研究によると、ＰＥＧの適応外であるとされている。[1]

ＮＨＫの番組が取りあげていたのは、まさにこのように、認知症や脳梗塞を患い、自力で食事をとることができない高齢者へのＰＥＧ手術の是非にかかわる問題であった。

点滴や注射、鼻から喉に管を入れた栄養摂取等にくらべて感染症も少なく、患者本人も苦痛をほとんど感じずにすみ、食事の補助にかかる手間も大幅に省ける胃瘻は、医療施設や介護施設からも歓迎され、日本では開発当初の意図と異なるかたちで、高齢者を中心に施されるようになった。

さらに、胃瘻は他の栄養補給方法より全身の免疫力をあげる効果にすぐれており、点滴による栄養補給（中

心静脈栄養）では、患者の生存期間は平均八ヶ月であるのに対し、胃瘻では一年九ヶ月というように、画期的な延命効果をあらわしている。たとえば、番組の冒頭に紹介された八十三才の女性は、脳出血を起こし、口から食べることも飲むこともできなくなってから、実に六年も生き続けているのである。

さきの引用文中にその文章が引かれていた医師の鈴木裕は、日本にＰＥＧを導入した第一人者であるが、この番組中では、他ならぬその人が、「多くの高齢者が意識もなく、まったく動くこともできないのに、ＰＥＧによって消化器だけが動いてただ生かされているのではないか。胃瘻が「お迎え」が来ている人を無理に引き留めているのではないか」と、高齢者への安易な施術に疑問を呈している。

胃瘻の普及は、死をどう受けとめるかという問題を、私たちにあらためて問いかけてくる。食べることができなくなっても栄養が与えられ生き続けられるという胃瘻が提示してくるその問題を、それのまさに反対の極にある、口減らしのための「姨捨」に関する話を通して考えていきたい。

伊藤由希子氏

一・村の人間としてのおりんの生と死

深沢七郎『楢山節考』は、次のような話である。

主人公おりんの村は信州の寒村である。貧しいこの村では、老人が七十才になると、口べらしのために楢山に捨てに行く。しかしそれは、村人たちにとっては「楢山まいり」なのであって、老人が楢山の神に会いに行くこととされているのである。

むろん、村人たちも、それが残酷な姨捨であることは重々承知している。しかし、彼らはそれを「楢山まいり」として行うことによってどうにか納得し、そのことによって貧しい村はどうにか続いていくことができる。いわば、村という共同体が、「楢山まいり」によって成り立っているのである。

おりんは、七十才になる前から、「楢山まいり」を心待ちにしていた。「おりんはずっと前から楢山まいりに行く気構えをしていたのであった。行くときの振舞酒も準備しなければならないし、山へ行って坐る筵(むしろ)などは三年も前から作っておいたのである」。おりんにとって「楢山まいり」は、つねに頭の片隅にあって、それに向けて生を過ごしていくべき、人生の集大成ともいうようなイベントであった。おりんが、先年に嫁を事故で亡くした息子の辰平の後妻におさまる女を探していたのも、自分が楢山に行った後のことを考え、家の世話をする嫁を求めてのことである。

隣村から辰平の後妻となる玉やんが来て、楢山に行く「支度」がいよいよ整ってきたことに喜んだおりんには、もうひとつどうしてもやっておかなければならないことがあった。

……振舞酒も、筵も、嫁のことも片づいてしまったが、もう一つすませなければならないことがあった。

おりんは誰も見ていないのを見すますと火打石を握った。口を開いて上下の前歯を火打石でガッガッと叩いた。丈夫な歯を叩いてこわそうとするのだった。ガンガンと脳天に響いて嫌(いや)な痛さである。だが我慢してつづけて叩けばいつかは歯が欠けるだろうと思った。欠けるのが楽しみにもなっていたので、此の頃(ごろ)は叩いた痛さも気持がよいぐらいにさえ思えるのだった。

おりんは年をとっても歯が達者であった。若い時から歯が自慢で、とうもろこしの乾(ほ)したものでもバリバリ噛み砕いて食べられるぐらいの良い歯だった。年をとっても一本も抜けなかったので、これはおりん

に恥ずかしいことになってしまったのである。息子の辰平の方はかなり欠けてしまったのに、おりんのぎっしり揃っている歯はいかにも食うことには退けをとらないようであり、何んでも食べられるというように思われるので、食料の乏しいこの村では恥ずかしいことであった。

村の人はおりんに向って、

「その歯じゃァ、どんなものでも困らんなあ、松っかさでも屁っぴり豆でもあますものはねえら」

これは冗談で云うのではないのである。たしかに馬鹿にして云っているのである。……年をとってから、しかも楢山まいりに行くような年になってもこんなに歯が達者では馬鹿にされても仕方がないと思っていた。[2]（以下ことわりがない場合は、傍点引用者）

若い頃には「自慢」であった丈夫な歯も、「楢山まいり」が視野に入る年になってくると、「おりんに恥ずかしいこと」になってくる。しかし「おりんに恥ずかしいこと」というのは、おりんがひとりで恥ずかしいと感じていることではない。それは「食料の乏しいこの村では恥ずかしいこと」なのであり、村のひとびとが「楢山まいりに行くような年になってもこんなに歯が達者」であることを「恥ずかしいこと」として馬鹿するようなことを言うからこそ、より一層「おりんに恥ずかしいこと」になるのである。

さらには、おりんの孫のけさ吉までも、「おらんのおばあやん納戸の隅で　鬼の歯を三十三本揃えた」という替え歌を唄って村の者たちの前でおりんの歯の丈夫さを馬鹿にし、おりんを笑いものにしていた。

おりんはこの村に嫁に来て、村一番の良い器量の女だと云われ、亭主が死んでからもほかの後家のように嫌なうわさを立てられなく、人にとやかく云われたこともなかったのに、歯のことなんぞで恥ずかしい

めにあうとは思わなかった。楢山まいりに行くまでには、この歯だけはなんとかして欠けてくれなければ困ると思うのであった。楢山まいりに行くときは辰平のしょう背板に乗って、歯も抜けたきれいな年寄りになって行きたかった。そこで、こっそりと歯の欠けるように火打石で叩いてこわそうとしていたのである。

村に嫁に来てから五十年間、おりんは村の人たちから後ろ指をさされることもなく、村の人間として立派に生きてきていたつもりだった。しかし、村の人間としての最後のつとめ、いわば総決算である「楢山まいり」が、自慢であったはずの丈夫な歯によって、体よくいかない可能性が出てきてしまったのである。

「食料の乏しいこの村」がどうにか成り立っているのは、「楢山まいり」があるからこそである。しかし「何(な)んでも食べられる」丈夫な歯は、「楢山まいり」に行く老人にふさわしくない。「楢山まいり」をしはたすためには、それにふさわしい「歯も抜けたきれいな年寄り」にならなければいけないのであり、それをやり遂げてこそ、この村の人間として十全に生ききることができるのである。

おりんの丈夫な歯に関して何度も確認される「恥ずかしい」という感情は、アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトが日本人独特の規範意識を「恥の文化」と言い表したように（『菊と刀』）、日本文化の根幹にかかわるものであることは間違いない。向坂寛は、葉、端、歯など、本体からハズれてはみ出した端にあるものと同語源の「外(は)ず」に通じるのが「恥ず」であると説明し、日本人は「本来あるべき姿から外(はず)れている時、恥を感じ」ると言う。[3] 年をとっても丈夫なおりんの歯は「食料の乏しいこの村」の人間としての「本来あるべき姿から外(はず)れ」ているものであり、「恥ずかしいこと」である。ゆえにおりんはその「外れ」た自身のあり方を、村の人間としての「本来あるべき姿」――「歯も抜けたきれいな年寄り」の姿へと近づけ、自身をふた

たび村の人間として位置づけなおそうとするのである。

結局おりんの丈夫な歯は火打石で叩いたくらいでは欠けず、おりんは「一世一代の勇気と力を出し」、「目をつむって石臼のかどにがーんと歯をぶっつけた」。上の前歯が二本欠けた嬉しさをこらえきれず、嫁に来たばかりの玉やんに「わしは山へ行く年だから、歯がだめだから」と欠けた部分を得意げに見せたおりんは、「これで何もかも片づいてしまったと踊り上らんばかりだった。辰平を探しに行きながら村の人たちにも見せてやろうと家を出て祭り場の方へ歩いて行ったが、実に肩身が広くなったものだと歩いて行った」。楢山に行くにふさわしい「歯も抜けたきれいな年寄り」になったということは、立派な村の人間にふたたびもどることができたということである。だからこそおりんはそれまでの「恥ずかしい」気持ちを払拭し、村の人間として、堂々と村の人たちの前に出て行こうとするのである。

はたして、年の瀬も迫った冬の日、おりんは辰平に背負われて「楢山まいり」に行く。おりんは筵を敷く場所、つまり自分の死に場所を自分で決め、その上に立った。「辰平は身動きもしないでいるおりんの顔を眺めた。おりんの顔は家にいる時とは違った顔つきになっているのに気がついた。その顔には死人の相が現れていたのである」。おりんは、村の人間としての生を閉じることまでを、みずからやってのけようとしていた。

村には「塩屋のおとりさん運がよい　山へ行く日にゃ雪が降る」という歌があり、雪が降りそうなときを選んで山へ行き（山へ行こうという時点で雪がすでに積もっていると、そもそも楢山までたどりつくことができない）、到着したときに雪が降り出すのが理想だとされていた。おりんはふだんから「わしが山へ行く時ァきっと雪が降るぞ」と力んでいたのだが、辰平がおりんを山に置いてその中程まで降りてきたとき、その言葉通り、雪が降り始めた。

「楢山まいり」には、「お山に行ったら物を云わぬこと」「山から帰る時は必ずうしろをふり向かぬこと」な

ど「お山へ行く作法」があり、それを守らなければならない。しかし、「本当に雪が降ったなぁ！と、せめて一言だけ云いた」い一心で、辰平は来た道をもどり、岩かげから、筵の上に座って念仏を称えるおりんに声をかけた。

「おっかあ、雪が降って運がいいなあ」

そのあとから、

「山へ行く日に」

と歌の文句をつけ加えた。

おりんは頭を上下に動かして頷きながら、辰平の声のする方に手を出して帰れ帰れと振った。

おりんの「楢山まいり」は、年来願っていたとおりにしはたされた。そしてそれが村で歌われる歌どおりになるということは、おりんの「楢山まいり」がまさに理想的なものであったことが保証されると同時に、おりんがある〝普遍的なもの〟に連なったということである。おりんはみずからの意志をもって「楢山まいり」をほぼ完璧にしはたすことで、村の人間としてのその生を終えたのである。

二．又やんの生と死

ところでこの話には、主人公のおりんとは対照的な「楢山まいり」も描かれている。

おりんの隣は銭屋と呼ばれる家だったが、その家の老父の又やんもおりんと同じく、今年七十才になろうと

している。しかし、何年も前から「楢山まいり」のことを念頭にさまざまな準備を進めているおりんに対し、又やんは「支度」のそぶりも見せない。そんな様子に、「おりんは又やん自身が因果な奴で山へ行く気がないのだと見ぬいていたので、馬鹿な奴だ！といつも思っていた」。

そしておりんが明日はいよいよ山に行こうという夜遅く、おりんは外で誰かが泣く声を聞いた。

わあわあと男の声であった。その声はだんだん近づいてきておりんの家の前に来たのであるが、その泣き声を消すように、あのつんぼゆすりの歌も聞こえたのである。

六根〳〵〳〵ナ
お供ァらくのようでらくじゃない
肩の重さに荷のつらさ
ア六根清浄、六根清浄

「つんぼゆすりの歌」というのは、「楢山まいりに行く時に、修養の出来ていない者とか、因果な者は行くことを嫌がって泣く者があるので、その時にお供の者が唄う」歌である。泣き声の主は、その夜「楢山まいり」に連れて行かれるため、倅（せがれ）に荒縄で縛られた又やんだった。しかしその後又やんは縄を食い切って逃げ出し、おりんの家の縁側でうずくまっていた。

おりんは又やんを、

「馬鹿な奴だ！」
と呆れて眺めた。……おりんは叱るように又やんに云い聞かせた。
「又やん、つんぼゆすりをされるようじゃァ申しわけねえぞ、山の神さんにも、息子にも、生きているうちに縁が切れちゃァ困るらに」
おりんは自分の正しいと思うことを、親切な気持で教えてやったのである。

おりんと対照的に、又やんは「楢山まいり」が姨捨であることを強く意識している。そして捨てられるのをひたすらに嫌がり、何とか逃げ出そうとする。しかしたとえ逃げ出しても、又やんが行けるのはせいぜい隣の家の縁側なのであり、「楢山まいり」そのものから逃げることはできない。この村の人間として産まれ、生きてきたかぎり、村の人間として「楢山まいり」に行ってその生を終えるしかすべはない。「山の神さんにも、息子にも、生きているうちに縁が切れちゃァ困るらに」というおりんの言葉は、村の人間としてのその生をまっとうするためには、「楢山まいり」を受け入れるしかないのだという「自分の正しいと思うこと」を又やんに教える。

しかしおりんの「自分の正しいと思うこと」は、単におりん一人の思い込みではない。年をとっても丈夫な歯が「食料の乏しいこの村では恥ずかしいこと」であったように、「楢山まいり」をしはたすことができないということは、村の人間としての「本来あるべき姿から外(はず)れ」ることなのであり、この村の人間として生きられないということなのである。

しかしそれでも結局「楢山まいり」を受け入れることのできなかった又やんは、おりんと同じ日に「荒縄で罪人のように縛られ」、楢山に連れて行かれる。だが、おりんを楢山に置いてきた帰途にあった辰平が又やん

と倅の姿を目撃したのは、楢山の手前の七谷（ななたに）という場所であった。

又やんは昨夜は逃げたのだが今日は雁字搦（がんじがら）みに縛られていた。芋俵（いもだわら）のように、生きている者ではないように、ごろっと転がされた。倅はそれを手で押して転げ落そうとしたのである。だが又やんは縄の間から僅（わずか）に自由になる指で倅の襟を必死に摑んですがりついていた。倅はその指を払いのけようとした。……そのうちに倅が足をあげて又やんの腹をぽーんと蹴とばすと、又やんの頭は谷に向ってあおむきにひっくり返って毬のように二回転するとすぐ横倒しになってごろごろと急な傾斜を転がり落ちていった。

辰平は谷の底の方を覗こうとしたその時、谷底から竜巻のように、むくむくと黒煙りが上ってくるようにからすの大群が舞い上ってきた。……

舞い乱れていたからすはだんだんまた谷底の方へ降り始めたのである。

「からすの餌食か！」

あんな大変のからすじゃァと身ぶるいをしたが、落ちた時は死んでしまっているだろうと思った。

又やんの「楢山まいり」は、楢山にたどりつくこともなく終わった。楢山へ行く「気構え」も「支度」も万端に、「楢山まいり」を見事にしはたし、その生に幕を引いたおりんに対し、「楢山まいり」を最後まで受け入れられなかった又やんは、自分の意志に反して、しかも倅の手によって谷底に突き落とされ、その死骸はからすに食われるというきわめて悲惨なかたちで、その生を終えるのである。

三．共同体への埋没

『楢山節考』は第一回「中央公論新人賞」の当選作として一九五六年に発表され、ひとびとにたいへんな衝撃を与えた。その衝撃の中身は、選考委員であった三島由紀夫、武田泰淳、伊藤整による選後評の座談会で、次のように語られている。

三島　…初めはどういう小説かまつたく見当がつかなかつた。変なユーモアの中にどすぐろいグロテスクなものがある。たとえばおばあさんが自分の歯を自分で欠くところなんかを出して、だんだんに暗い結末を予感させていくわけですね。ぼくは正直夜中の二時ごろ読んでいて、総身に水を浴びたような感じがした。最後の別れの宴会のところなんか非常にすごいシーンで、あそこを思い出すと一番こわくなる。そのこわさの性質は父祖伝来貧しい日本人の持つている非常に暗い、いやな記憶ですね。妙な、現世にいたたまれないくらい動物的な生存関係、そういうものに訴えてわれわれをこわがらすのであつて、ポーの恐怖小説みたいな知的コンポジションはない。だからこの小説の恐怖の質というものはあまり高いものではない。しかし高いものでないからこそ、こんなに深く、妙に心にねばりついて入つてくるのだ。…

（中略）

三島　…何かじめじめした、暗い沼の底に引きずり込まれるようで……何かこわいというか、「説教節」や「賽の河原」や「和讃」、ああいうものを読むと気分がずつと沈んでくる、それと同じ効果を感じる。つまりこの登場人物は全部秘密を知つているわけです、ことに別れの宴会で死に方を教える連中なんかは秘密を知りつくしているのだから、そういう人間の裏の心理を想像するとこわくなるのです。自分の肉身

を自分で殺した連中がどてらを着て、毎日平気で村の生活をしているということが非常におそろしくて……。

武田　耐えがたいな。

三島　そう、とても耐えがたいんだ。

伊藤　ぼくは田舎で貧しい農漁村に育つたけれども、そういう農漁村の年寄りたちの生き方、考え方を延長していけば、あそこに達する気がしますね。たとえば年をとつて中風になつたものを物置小屋に入れておいて、かろうじて生きていけるだけの世話しかしない、そういうものと全然無縁じやない、だからおそろしいという感じがするな。

（中略）

三島　やみの世界だね。母胎の暗い中に引き込まれるような小説だね。[4]

『楢山節考』は、主人公おりんがみずからの人生を見事にやり終える姿を美しく描くというような種の小説ではない。「楢山まいり」に人生を集約させていこうとするおりんの姿と同時に、おりんとは対照的な又やんの死に方や、「楢山まいり」をめぐる村のひとびとの言動や対応が描かれることで、三島が「父祖伝来貧しい日本人の持つている非常に暗い、いやな記憶」「現世にいたたまれないくらい動物的な生存関係」「人間の裏の心理」「やみの世界」と言うような、人間が現実に抱えているさまざまな闇の部分を、この小説はひとびとに突きつけた。そして伊藤が言うように、ここで描かれる村のひとびとのあり方が現実の村のひとびとのあり方とたしかに地続きであるからこそ、そしておそらく都市で生活する現代のひとびとのあり方とも地続きであるからこそ、この小説はひとびとに強い衝撃を与えたのである。

しかしだからと言って、この小説が、「楢山まいり」という名目での姨捨や、姨捨と知りながらそれをおこなっている村人達の非情、あるいは共同体のために個人を犠牲にする社会構造の問題や人間がそもそも持っている残酷さ等々を暴き出そうとしているというわけではない。少なくとも『楢山節考』を読んで、そのような社会や人間の問題をあぶりだそうという著者深沢七郎の意図は感じられないし、読者の多くもその点に衝撃を受けたのではないように思えるのである。

この小説の要のひとつは、おそらく、佐藤正英が次のように指摘するところにあるであろう。

武田泰淳がいち早く指摘したように、『楢山節考』の世界の核心は、女主人公であるおりんが「早く楢山に登りたがっている」ところにある。……おりんの村には、七十歳になった老人は楢山に捨てられるという掟がある。……穀物の絶対量が不足がちであり、楢山まいりの掟は、それに対処する慣習である。おりんは村のこの掟に忠実である。おりんは七十歳近くにもなって歯が丈夫であることを恥じている。曾孫の顔を見ることになりはしないかと恐れてもいる。おりんは村落共同体の慣習の中に埋没しきっている。

しかし村落共同体を存立維持させるための掟に対する絶対的随順からは「早く楢山に登りたがっている」おりんの在りようは説明できない。絶対的随順は、楢山まいりの掟に従容として従う在りようをもたらすであろうが、「早く楢山に登りたがっている」在りようをもたらしはしない。登ることに対して従順であることと、早く登りたがることとの間には溝がある。両者は異質な在りようである。[5]（傍点佐藤）

武田泰淳の指摘というのは、先の座談会における、「この老婆が早く死にたがつている、早く楢山に登りた

がつているという考え方、それがこの小説を美しくしているのであつて、もしあれが泣き叫ぶような側に立つていたら、この小説は全然成立できなかつた[6]」という武田の発言を指している。「早く死にたがつている、早く楢山に登りたがつている」というおりんのあり方が、この小説を成り立たしめている根本にあると武田は言うのである。

佐藤が言うように、「早く楢山に登りたがっている」というおりんのあり方は、「楢山まいり」を粛々と受容するような、「村落共同体を存立維持させるための掟に対する絶対的随順」という種類のものではない。「早く楢山に登りたがっている」という姿勢は、村の掟を仕方のないものとして消極的に受容するといった「随順」を超え、おりんその人の意志や個性を強烈に打ち出すものである。「歯も抜けたきれいな年寄り」になろうとおりんがみずから歯を折るのは、それを象徴するような出来事である。「楢山まいり」に行くのにふさわしい姿になろうとしたおりんの行動には、村の人間として十全に生ききろうという、執念とも言えるようなおりんの強烈な意志があらわれている。

考えてみれば、七十才になれば村の年寄りはみな「楢山まいり」に行くのであるから、おりんのように歯が揃っていても「楢山まいり」に行けないわけではない。歯が達者であるという「おりんに恥ずかしいこと」は、たしかに村人達に馬鹿にされるような「この村では恥ずかしいこと」でもあるのだが、だからといって、歯が丈夫な年寄りは村の人間として認められないということではない。ただ、歯が抜けていれば「楢山まいり」に行くのにより適した姿――「きれいな年寄り」――になることができるということなのであり、「楢山まいりの掟に従容として従う」ということであれば、わざわざ歯を折る必要はない。にもかかわらず、理想的な「楢山まいり」を成し遂げて完璧なまでに村の人間としての生を生ききろうとするおりんは、「村落共同体の慣習の中に埋没しきっている」だけではなく、そのことを徹底することを通して、それ以上の、もうひとつ先の、

ある〝普遍の世界〟をすでにまなざしているのである。

そして、おりんのそのような強烈な意志や思いというものは、又やんとの対比において、より鮮明に浮かびあがってくる。

又やんの「楢山まいり」は楢山にたどりつくこともなく終わったのであるが、だからと言って、又やんの「楢山まいり」が失敗だったというわけではない。「楢山まいり」の前の晩、宴会の席ですでに山に行ったことのある人に教示を受けた後、辰平はある人に、「おい、嫌ならお山まで行かんでも、七谷の所から帰(けえ)ってもいいのだぞ」「まあ、これも、誰にも聞かれないように教えることになっているのだから、云うだけは云っておくぜ」と小声で告げられる。又やんの倅もおそらく同じことを誰からか教えられていて、それで七谷で又やんを突き落としたのであろうが、つまり、楢山までたどりつかない「楢山まいり」が村では暗に許容されてきたのであり、そのように半端なものであっても、村のひとびとにとっては「楢山まいり」として理解されてきたのである。

又やんの最期は偶然辰平に目撃されたが、楢山に行く途中のどこで老人が死のうとも、連れて行った本人以外の村のひとびとはその死に場所や死に方を知るよしもない。楢山の方へ連れて行かれ、二度と帰ってこなかった老人たちは、村人達にとって、みな、「楢山まいり」に行ったひとびとである。その前の晩に又やんが逃げ出して嫌がったことが村人達に知られたとしても、それでも現に楢山の方に行って帰ってこなかった又やんは、村人達にとっては、たしかに「楢山まいり」に行った人の一人になるのである。

辰平が宴会の席でこっそり教えられたことや、「楢山まいりに行く時に、修養の出来ていない者とか、因果な者は行くことを嫌がって泣く者があるので、その時にお供の者が唄う」という「つんぼゆすりの歌」の存在は、前に「楢山まいり」に行った老人たちの中にも、又やんのようにどうしてもそれを受け入れられなかった

者が少なくなかったことを私たちに教える。またたとえ「楢山まいり」を受容したとしても、その多くは、おりんのようにみずから「楢山まいり」に飛び込んでいくというよりは、納得のいかないいろいろな思いを抱えたままに、しかし、自分の前にも多くの老人たちが行ったのだから、と「楢山まいり」に向かうというようなものであっただろう。「早く楢山に登りたがっている」おりんのありようはこの村でも特異なもので、みずからの生に執着し、「六根清浄、六根清浄」と諭されてしまう又やんの方がむしろ普通の反応だったのではなかろうか。

四．死生を位置づけるということ

西暦八〇〇年頃に成立した『日本霊異記』という仏教説話集は、多くの因果応報譚を集めた書物である。そこには、貧しさに困窮した人が仏像に祈ると富を得ることができるといった善因善果の話や、生きている兎の皮を剥いだ人が突然皮膚病にかかって苦しみ死ぬという悪因悪果の話などが多数収められている。この本をまとめ著した薬師寺の僧侶景戒（きょうかい）は、「祈（ネガ）ハクハ奇記を覧（み）む者（ひと）、邪（じゃ）を却（しりぞ）けて正に入（い）れ（この書物を読んだ人が、間違ったことをやめ、正しい道に入っていくことを願う）」と言うが、本書のテーマである因果応報それ自体が、実はある大きな問題を孕んでいる。

景戒は下巻の序に、次のような話を引く。

昔一人の僧が山に住んでいて、食事のときは必ずからすに飯を施していた。ある日のこと、食事を終えた僧が楊枝を噛みながら石ころをもてあそんで投げていると、僧が気づかぬところでからずの頭に当たって、からすは死んでしまった。からすはその山に住む猪に生まれ変わり、僧の住居の上のあたりで石をひっくり返しな

がら食べ物をあさっていた。すると今度はその石が僧に当たり、僧は死んだ。

景戒はこの話を「猪は仕返しをしようと思ってはいなかったのだが、石がおのずと当たって、僧を殺してしまった。無意識のうちに罪をなせば、無意識のうちになす仇を返されることになるのである」とまとめる。つまり、いくら善行をなし、悪行を退けようと努力しても、ひとびとは自身のあずかり知らぬところで悪行をなしてしまうのであり、そのために悪果を受けなければならないというのである。

もし世の中が事実そのようになっているのならば、ひとびとが善行をなし、悪行を退けようとする努力自体が、ほとんど徒労になってしまうということになりかねない。つまり、そもそも景戒が因果応報譚を収集した意図があらためて問われてくるのである。

ところで、下巻の第三十四話は次のような話である。

巨勢(こせの)哲女(あさめ)という女が、あるとき急に病気になり、首に大瓜のような腫れものができた。切るような痛みがあり、何年経っても治らなかった。「宿業がこのような事態を招いたのであろう。宿業の報いは、いまこのようにあらわれた病気だけではすまないはずだ。罪を滅してこの病を治そうとするならば、善行を積むしかない」と考えた哲女(あさめ)は出家し、修行を始めた。それから十五年が経った頃、忠仙という行者が来て、哲女を見て気の毒に思い、「この病を治すために、薬師経・金剛般若経各三千巻、観世音経一万巻、観音三昧経一百巻を読みましょう」と発願した。それからさらに十四年が経って、まだ経すべてを読み終わらないうちに、腫れものの口が自然に開き、願の通り哲女は平復した。

病気になってからの最初の何年かの間、哲女はおそらく腫れものの原因を探り、あるいは何らかの治療法を試しながら、腫れものが治りもとの日常に戻れることを期待していただろう。しかしどうやっても治らない病に、哲女はその原因を「宿業」として捉えるようになる。つまり、前世という自分のあずかり知らぬところで

悪行をなしていたために、いまこのような病に苦しんでいるのだと考えるようになったのである。そしてそのように捉えたことで呰女は出家・修行し、結果、病気は治る。

とはいえ、呰女は自分の病の原因である「宿業」の具体的中身がわかったのではない。凡人である呰女には、自身に関する因果応報を見通す力はない。が、たとえ自身にはそれとあきらかに見えなくても、因果応報の理法はたしかにこの世界を貫徹しているのであり、だからどんなに不条理なことがあろうとも、それは理由あってのことなのだ――、そのように自身を因果応報の網の目の中にいる存在として位置づけること自体において、呰女はある納得を得ることができるのである。

この世界に因果応報の理法が貫徹していると考えることは、この世界をひとつの意味を持った〈物語〉とも言えるものとして捉えるということである。そしてそのことはまた、その世界の中に位置づけられた自身の生も、その〈物語〉の一部として、意味を持ったものとして捉えられてくるということを意味する。

たしかに、凡人であるひとびとには因果応報を見通す力はなく、景戒が『霊異記』で示したような善因善果・悪因悪果の出来事によって、世界の〈物語〉のほんの一端を垣間見ることができるだけである。しかし、そこで垣間見えた世界のあり方の中に自身を位置づけ、それによって自身の生に何かしらの納得を得ることができれば、ひとびとは自身の因果を好ましいものにすべく、みずからの生を積極的に生きることができるようになるのである。

僧侶の南直哉（じきさい）は、脳科学者の茂木健一郎との対談で、因果応報の教えについて、次のように言う。

> ブッダが因果を説くのは、「あらかじめ因果によってものごとは決まっている」ということではなくて、人が努力し未来に希望を持ち、自分が自分として立っていくために絶対必要な考え方だからというわけで

す。だから、因果を信じろと。[7]

結局呰女に関する話でも、修行を開始してから二十九年もの月日が経っていることや、忠仙が一体どういう役割を果たしているのかなど考えれば、はたして呰女の出家や修行が善因となって病気の平復という善果をもたらしたのか、その因果関係は判然としない。しかしこのような話の中に、たとえかすかにでも、世界に貫徹する因果を垣間見、感じとり、そして自身もその世界の中にいるのだと納得できれば、ひとびとは「正に入(い)る、つまり仏道へと歩みいり、自分のこの後の生をよりよいものにすべく努力することができるのであり、そのことを望むからこそ、景戒はたくさんの善因善果・悪因悪果の事例を集め、ひとびとが生きているこの世界が因果応報の理法が貫徹する〝普遍的な世界〟であることを、ひとびとに示そうとしているのである。

おりんが「楢山まいり」を完璧にしはたして村落共同体に絶対に随順することの先で、まなざし連なろうとしていた世界も、おそらくこのような世界と関係があるのであろう。

七十才になったとたん、それまで自分が慈しみ育て、一緒に暮らしてきた家族の手によって捨てられることは、村の老人たちにとってまったくの不条理としか言いようがないことである。しかしその姨捨が、「楢山まいり」としてこの村自体が紡いできた大きな〈物語〉の一部であるのだと捉えれば、老人たちはそこで自分の生や死がまったく意味のないものではないのだと、何らかの納得をしながら、死を受け入れることができる。おりんを楢山に連れて行くことに乗り気ではない息子の辰平におりんが言った、「向う村のわしのおばあやんも山へ行ったのだぞ、このうちのお姑も山へ行ったのだぞ、わしだって行かなきゃア」という言葉は、「楢山まいり」をやり遂げることで、いままでに楢山に行った先人たちの列に自分も加わり、この村の〈物語〉の一部をなすことができるのだという、おりんにとって「楢山まいり」が持つ意味を私たちに教える。

むろん、だからといって、姨捨という習慣が許容されてしかるべきというわけではない。が、又やんが逃げ出してたどりついた先がせいぜい隣の家の縁側だったように、この村の人間として産まれ生きてきた人間は、現に村の人間として「楢山まいり」に行ってその生を終えることから逃げだすことはできない。おりんはそのことにどこかで気づいているからこそ、自身が持っているさまざまな思いや納得のいかないことを心のどこかに抱え込みながらも、いずれにせよ逃れることのできない「楢山まいり」を拒絶して村の人間としてのあり方から「外れ」ていくよりは、ひとつのほつれもないほどの、つまり一点も「恥ず」べきところがない完璧なまでの「楢山まいり」をすることで、村の人間としての自身の生を生ききり、それによって自身の生を意味あるものとして輝かせようとしているのではないか。

先にも述べたように、中途半端なかたちで終わった又やんの「楢山まいり」も、村人達にとってはやはり「楢山まいり」であることにかわりはない。しかし、「楢山まいり」を受け入れることができず、死ぬその時に、自分の生をどこにも位置づけられなかった又やんの死は、やはり悲惨なものであったと言うしかないだろう。又やんは最期の瞬間、何も納得できず、何も受け入れられないままに死んでいったのである。

そして、この村の人間にとって「楢山まいり」がけっして逃れられない不条理であったように、現代を生きる私たちにとって、死は誰もが逃れることができない不条理である。死を前に、自分のそれまでの生そして死を位置づけていくことの重要性は、人生を〈物語〉として語ることで自分の人生をある意味納得し、死をも受け入れることができるようになるというナラティヴ narrative の方法として、医療の臨床領域でも重要性が指摘されてきたことである。

しかし、〈物語〉というあるまとまったかたちで人生を語ることは、誰でもができるというような簡単なものではないように思える。このことに関して、臨床心理学者の河合隼雄の「コンステレーション」の考えを作

家の柳田邦男が紹介した次の文章は、ある示唆を与えてくれる。

「コンステレーション」というのは星座のことで、天の星をボーッと見ていると、全体の中である星座のかたちがスッと見えてくるというようなことが大事であると、河合は述べていた。

今直面している問題や悩み事だけに気持ちを奪われ、視野狭窄的になっていると、身動きがとれなくなって、ますます気持ちが暗くなって、展望が開けなくなる。もっと人生全体や人間関係全体や時代の状況などをボーッと眺めていると、《あゝ、そうなのか》と腹に落ちてくるものがある、というのだ。[8]

天の星のすべてを、つまり「人生全体や人間関係全体や時代の状況」のすべてをあきらかに理解する必要はない。それらを「ボーッと眺めて」、そこに星座がひとつでもふたつでも、かたちをもって見えてきて、それで《あゝ、そうなのか》と腹に落ちてくるもの」があれば十分なのである。天の星のすべてがわからなくても、そこにひとつでも何か「腹に落ちてくる」星座が見えてくれば、ひとは自分の状況に納得し、人生を切りひらいていけるというのである。

紫の上に死なれた光源氏は、その一年後、「宿世のほども、みづからの心の際も残りなく見はてて心やすきに、今なんつゆの絆(ほだし)なくなりにたるを、これかれ、かくて、ありしよりけに目馴らす人々の今はとて行き別れんほどこそ、いま一際(ひときは)の心乱れぬべけれ。いとはかなしかし。わろかりける心のほどかな」という言葉を残して出家する（紫式部『源氏物語』）。自分の「宿世」も心のあり方も余すところなく見極め、「心やすき」今となっては、この世を去るのに何の妨げもなくなっているはずなのに、以前より親しくなったひとびとと別れるときには、いま一層心が乱れるに違いない。まったくはかなく、悪い心のありさまだよ——。

親しい人との関係やこの世への執着をいつまでも断ち切ることができない己の愚昧な心を嫌というほど認めつつ、それでも光源氏はみずから俗世を離れ、出家し、そして死んでいく。彼をしてそうせしめたものは、紫の上と生きたこと、そしてその死を通して、「宿世のほども、みづからの心の際も残りなく見はてて心やすくなったという実感であった。それがこの世や自身に関するあらゆることについての達観ではないことは、この時点になってもまだひとびととの別れに心乱れるだろうと彼自身が述べていることからもわかるが、それでも、「心やすき」という実感は、たしかな重みをもって、光源氏にみずからの人生の区切りをつけさせたのである。

相良亨は、このときの光源氏について、次のように述べている。

> みえざる大いなるものの内にある自分が、そのみえざるものの内にいかに位置づけられているかを知ることは、心の安らぎである。[9]

「人生全体や人間関係全体や時代の状況」のすべてを見通せないままに、しかしそこにほんのわずかでも意味のあるかたちを見出し、納得して生き、死んでいくこと——。

おりんや又やんの生き方・死に方は、私たちの生き方・死に方を問うてくる。

［註］

1 会田薫子「高齢者と延命治療――「寝たきり老人」と個人の選択をめぐって」（高橋都・一ノ瀬正樹編『死生学5 医と法をめぐる生死の境界』東京大学出版会、二〇〇八年）。引用文中の鈴木論文は、鈴木裕『おなかに小さな口』芳賀書店、二〇〇〇年。

2 深沢七郎『楢山節考』新潮文庫、一九六四年。

3 向坂寛『恥の構造』講談社現代新書、一九八二年。

4 「新人賞選後評」（『中央公論』一九五六年十一月号）。

5 佐藤正英『隠遁の思想』ちくま学芸文庫、二〇〇一年。

6 前註4。

7 茂木健一郎・南直哉『人は死ぬから生きられる』新潮新書、二〇〇九年。

8 柳田邦男『「気づき」の力』新潮文庫、二〇一〇年。

9 相良亨「人生の総括」（『相良亨著作集4』ぺりかん社、一九九四年所収）。